〔 研究区分： 地域課題解決研究 〕

研究テーマ：	知的障害者施設職員の障害者観の変容に与える要因の研究	
研究代表者：	保健福祉学部 人間福祉学科 講師・手島洋	連絡先： teshima@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：	社会福祉法人ひとは福祉会 理事長・寺尾文尚	

【研究概要】
知的障害者施設職員が持つ障害者観を明らかにすることを目的に共同研究者の所属施設の全職員 90 名を対象に調査した結果、①現在は肯定的な障害者観が強く存在している、②援助業務を経て否定的な障害者観から肯定的な障害者観へ重点が移行した、③社会の障害者観はマスコミの影響が強く福祉教育の効果が乏しい、などの障害者観の特徴が具体的にわかった。この調査結果から、施設職員は障害者観は、現在は肯定的な傾向が強いが、就業前には社会の一般的なイメージと同じだったものが、職務を通じて障害者観を変容させていったことが明らかになった。

【研究内容・成果】

1．研究の背景

日本の障害者の権利擁護の取り組みは、障害者虐待防止法や障害者差別解消法が制定されるなど法制度の整備は一定の進展を見せているが、他方では新聞紙上などでしばしば障害者施設での虐待事件が報道されている。このような虐待が起こる要因の一つとして、職員が障害者をどのように理解しているのかという「障害者観」が、障害の有無に関わらない共生や障害を個性とみる見方など「普通の市民」と見る価値観に基づいていないことが考えられる。施設職員の障害者観の現状を理解することで、施設職員による障害者虐待防止への新たな示唆を得ることができると考えられる。

2．研究の目的

本研究は、知的障害者福祉施設職員の障害者観の現状や形成過程を明らかにし、その障害者観が変容することで障害者の権利侵害を軽減できる効果についての基礎的な調査研究である。

3．研究の方法

研究方法は、共同研究者の所属する社会福祉法人ひとは福祉会の職員を対象に半構造化記述式の記述式調査を行った。記述式調査は、正規職員と非正規職員を併せて 90 人の全職員を調査対象とした。主な調査内容は、個人の持つ障害者観、障害者観に影響を与えた要因だった。これらを回答結果について、職員の属性、職種、経験年数、資格有無などで比較し、結果を類型化し特性を分析した。

調査期間は、平成 26 年 2 月で、調査票配布数 90 に対し、回答があった調査票は 70 だった（回答率 77.8%）。

4．倫理的配慮

調査に際し項目及び結果集計・分析において職員や施設利用者などの具体的に個人を特定できるような個人情報を回答する内容は含めていない。その他、調査場所への配慮、調査票の集約・保管の情報管理など、個人情報への配慮の同意を得て調査を実施した。なお、本調査の調査内容と方法について県立広島大学研究倫理審査会の審査を受け承認を得た。

5．研究の結果

＜調査の集計結果＞

（1）職員の障害者に対するイメージ

＊肯定的なイメージの内容は、「特別な人ではない」が最も多く（55.7%）、次いで「純粋そう」（44.3%）、「癒される」（42.9%）だった。

＊否定的なイメージの内容は、「意思が伝わりにくそう」が最も多く（51.4%）、次いで「手がかかりそう」（24.3%）、「変な行動をしそう」（12.9%）だった。

＊肯定的イメージは、「就職前」に 114 項目選んでいたが、「現在」は 206 項目選んでいる。また、否定的イメージは、「就職前」に 146 項目選んでいたが、「現在」は 91 項目選んでいる。

（2）職員の障害者観の変化

＊仕事を通じての障害者観の変化は、「変化があった」（72.9%）が「変わらない」（12.9%）の 5 倍以上の回答を得ていた。

＊良く変わった点は、「健常者と変わらない」、「人として良い印象を受ける」、「勤勉さやまじめさ」、「潜在能力を感じる」などが主な内容だった。

＊悪く変わった点は、「関わりの難しさ」、「人間らしさを感じる」、「なお違いを持って関わる」などが主な内容だった。

（3）社会の人の障害者のイメージ

＊職員が考える社会の人の障害者のイメージで、否定的なものを選んだ項目数は肯定的なものを選んだ項目数の 2.22 倍多かった。

＊肯定的なイメージの内容は、「純粋そう」が最も多く（47.1%）、次いで「素直そう」（28.6%）、「突出した才能がある」（22.9%）だった。

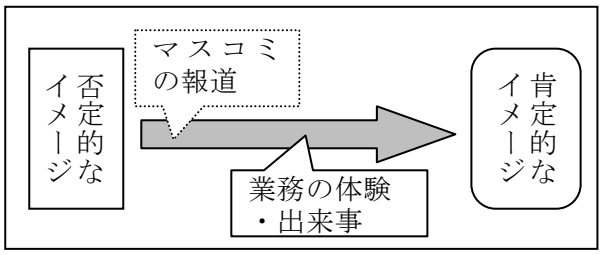
＊否定的なイメージの内容は、「変な行動をしそう」が最も多く（60.0%）、次いで「意思が分かりにくそう」（54.3%）、「手がかかりそう」（50.0%）だった。

＊社会の人が持つ障害者のイメージに影響を与えたと考えられることは、「マスコミ」が最も多く（72.9%）、次いで「まちで出会った障害者」（38.6%）、「小中学校の教員」及び「小中学校の同級生」（各 14.3%）だった。

6．調査結果の考察

調査の集計結果からは、以下の内容が明らかになった。①「障害者は特別な人ではない」や「純粋そう」などの肯定的な障害者観が「意思が分かりにくそう」や「手がかかりそう」などの否定的な障害者観よりも強い割合で存在していた。②職員が就業してから援助業務を通じて否定的な障害者観から肯定的な障害者観へ重点が大きく移行しており、なかでも（障害者の人たちには）「大きな可能性があること」の理解が大幅に進展していた。③職員から見た社会の人々の障害者観は肯定的なイメージよりも否定的なイメージが 2 倍以上多くとらえられていると考えられ、さらにその障害者観の形成にはマスコミの影響が強く福祉教育の効果が乏しかった。

＜図　職員の障害者観の変容と影響を与えたもの＞



これらの調査結果から、施設職員は現在では障害者に対して肯定的な障害者観が強い傾向があるが、就業前には社会で見られるようなマスコミの影響による否定的な障害者のイメージを持っていたが、職務を通じた自らの体験や出来事など具体的に障害者に毎日接することで自らの障害者観を変容させていったと考えられる。（図参照）